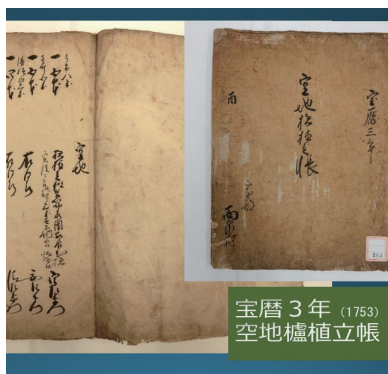


活かし、伝える

江戸時代の久留米知る講座 収蔵資料で説得性増す

文化財保護課では、「私のまちの歴史と文化財」というテーマで出前講座を受け付けています。講座では、市の収蔵資料の実物を見てもらったり、説明の根拠として資料画像を使ったりします。

令和6年10月31日、「久留米藩と^{はせ}」と題して、江戸時代の久留米藩の経済事情を、藩の商品作物であった^{はせ}を中心に紹介する出前講座を行いました。江戸時代中期、久留米藩は、米以外の収入源を確保するために、^{はせ}や藍といった商品作物の栽培



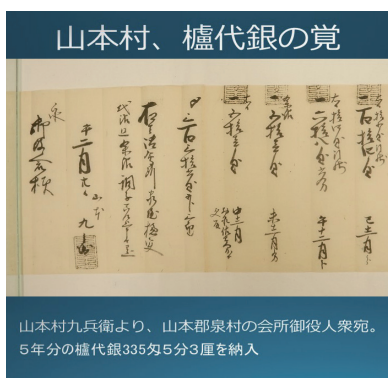
出前講座の資料の一部
「空地植立帳」の表紙と見開き部分

を奨励しました。^{はせ}の植え立てや、^{はせ}の実際の流通による収益を説明する際、キーポイントとなったのが、^{はせ}の永家資料です。

弥永家資料は、江戸時代に山本郡西泉村（現・山本町^{みのう}耳納）の庄屋職を勤めた弥永家に伝来した古文書群で、藩の農政に関する記述が多くあります。宝暦3年（1753）の「空地植立帳」には、誰が何本^{はせ}を植えたのかが書かれています。

また、ある覚書では、山本久兵衛という人物が、山本郡泉村の役人に宛てて、^{はせ}の実際の売却で得た5年分の代金を納入したことを報告しています。

受講者は、資料から分かる、当時の村人が^{はせ}で生計を立てていた様子を、興味深く聞いていました。



植代銀の覚書

久留米藩参勤交代の記録 秋月博物館で街道の実態示す

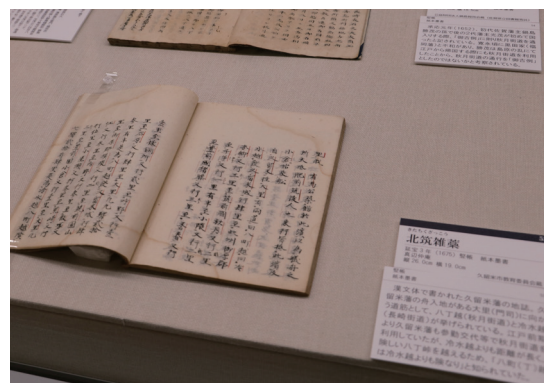
久留米市の収蔵資料「北筑雑藁」が、朝倉市秋月博物館特別展「受け継がれし秋月藩～藩主の心得～」(会期：令和6年10月19日～12月15日)で展示されました。秋月藩は、黒田長政の三男長興が福岡藩から所領を分与されて成立しました。展示では、秋月黒田家の足跡を辿るとともに、特集として、参勤交代で使われた秋月街道や、秋月藩の治水遺構が紹介されました。

北筑雑藁（真名部仲庵著、延宝3年（1675））は、秋月街道の特集部分で展示されました。本資料は、漢文体で書かれた久留米藩の地誌で、後半には、秋月街道の宿場町に関する記述があります。展示箇所からは、久留米藩が参勤交代の際に「筑前国秋月」を含む8つの宿場町（八町）を経て大里（現・北九州市門司区）へ向かう道を使用していたことが分かります。

秋月博物館学芸員の平田詩織さんは、その記述に関

して、「久留米から大里に向かう道「八丁越（＝秋月街道）」について、各宿場までの距離や、八丁越と呼ばれた由来が記されており、秋月街道がどのような道だったかを観覧者にイメージしてもらいやすい。」と話しました。

秋月街道は、江戸時代前期に長崎街道（資料中では「冷水越」）が整備された後は、参勤交代では利用されなくなります。北筑雑藁は、諸藩が利用した秋月街道の実態を今に伝える重要な資料です。



「久留米」「秋月」などの宿場町の地名には朱線が引かれている